

神奈川県情報部会主催「情報科実践事例報告会2025」報告

神奈川県高等学校教科研究会情報部会長
神奈川県立上鶴間高等学校長

柴田 功

1. はじめに

神奈川県高等学校教科研究会情報部会（以下「神奈川県情報部会」）では、情報科の授業をより魅力的なものにすることを目的として、優れた授業実践を共有するイベント「情報科実践事例報告会」を毎年開催している。近年はオンラインと対面を併用したハイブリッド形式で実施しており、神奈川県内にとどまらず、全国各地の優れた情報科教員による事例発表が行われている。

一つの県の研究会のイベントが、どのようにして全国の情報科教員が集まる一大イベントへと成長していったのか、また、その魅力はどこにあるのかについて、本研究会の部会長の立場から紹介したい。本稿が、各自治体等における研究会の充実に向けた参考となれば幸いである。

2. 発表者は勇者

情報科の教員は、各高校に一人しか配置されていないことが多い。また、情報科の歴史は浅く、教科としてスタートしてから四半世紀にも満たない。さらに、教材についても、近年ようやく充実してきたとはいえ、他教科と比べるとその数は極めて少ないのが現状である。

このような状況の中で、情報科の教員は、授業の進め方、扱う題材、授業構成、使用するツール、提出課題の設定などを、一人で判断せざるを得ないことが多く、常に手探りの状態で授業改善に取り組んでいる。どれほど優れた授業であっても、必ず失敗例や改善すべき点は存在する。そうした点も含めてすべてをさらけ出し、動画やスライド資料を用いて実践事例を発表し、意見交換を行う

ことは、授業改善に向けて極めて価値が高く、重要な取組である。

神奈川県情報部会では、このような場を提供するため、平成15年から情報科の授業実践事例を共有する研修会を実施してきた。年々内容が充実する中で、平成29年度からは、基調講演に加え、情報科教員による口頭発表およびポスター発表という構成となり、発表者・参加者ともに増加し、全国大会と呼んでも差し支えない規模のイベントへと成長した。

運営においては、「実践事例を発表したい」という思いにできる限り応えることを重視し、「県境を意識しない」「だれも排除しない」というポリシーを大切にしてきた。また、どのような事例発表であっても、聴き手にとって必ず学びがあるという考えのもと、自らをさらけ出して発表する姿勢を称え、「発表者は勇者だ!」というスローガンを掲げて運営してきた。こうした姿勢は多くの参加者の共感を得ており、現在も変わらず受け継がれている。

3. ピンチはチャンス

集合形式での実践事例報告会は年々充実してきたが、令和2年度からは、新型コロナウイルス感染症の拡大防止策として、完全オンライン形式での開催を余儀なくされた。対面で集まることができない一方で、参加地域に制約がなくなったことから、全国の情報科教員に積極的に参加を呼びかけることが可能となった。

従来ポスター発表はYouTubeによるオンデマンド動画配信に変更し、口頭発表はZoomミーティングによる実施とした。これらの動画、要項、

ハイパーリンク、アンケートフォームなどはGoogleサイトに集約し、特設サイトとして一元的に公開した。

こうした工夫の結果、発表本数は約30本から約50本へと大幅に増加し、参加者の地域も全国へと広がった。また、発表動画を繰り返し視聴できるなど、オンラインならではの多くのメリットが生まれ、コロナ禍というピンチをチャンスに変えることができ、令和5年度までオンライン形式で実施した。このような取組は、オンラインイベントの一つのモデルとして示すことにもつながった。

4. オンラインと対面の併用

令和6年度からは、希望制ではあるが、オンライン配信会場である上鶴間高校に集合して参加できる形を取り入れた。令和7年度の文部科学省の須藤祥代教科調査官による基調講演はオンライン・対面の両方で聴講可能とし、その後の懇親会も含め、会場に集まった参加者同士がオンラインでは得がたい濃密な交流を行う場となった。

情報科実践事例報告会2025（12/26実施）

配信会場：神奈川県立上鶴間高等学校

サイト：<https://sites.google.com/gl.pen-kanagawa.ed.jp/2025jissennjirei/>



- 9:00 オープニング
- 9:15 オンデマンド視聴（39事例）
- 10:15 座談会（4分科会）
- 11:30 ランチタイム（Zoom会議室解放）
- 13:00 午後の部あいさつ
- 13:10 ポスターセッション（4分科会10事例）
- 15:40 講演（文部科学省 須藤祥代 調査官）
- 16:20 指導講評

一方、発表者と聴き手によるオンライン形式の座談会は、従来通りZoomミーティングで実施した。オンライン参加であっても質の高い協議が行われ、動画では聞くことのできなかつた深い話題や失敗談についても、自由に質問できる場となっ

た。聴き手からは、実践事例を自分の授業に生かそうとする強い意欲が感じられた。

このように、オンラインの利点を生かしつつ、対面の良さも取り入れたハイブリッド形式へと進化したことで、本報告会は規模・内容の両面において、さらに価値の高いイベントへと成長したといえる。

5. 冬フェスも夏フェスも神奈川

令和7年度の実践事例報告会では、オンデマンド動画による発表が36本、Zoomによる同時双方向型のポスター発表が4分科会に分かれて10本行われ、合計46本の発表が実施された。参加者は約200名にのぼり、北海道から沖縄まで、全国各地の情報科教員が発表者または聴き手として参加した。また、高校教員に限らず、中学校・大学の教員、行政職員、民間企業の関係者など、多様な立場の参加者が集まり、年齢層も若手からベテランまで幅広く、地域・世代・業種を超えた交流の場となった。今回の発表テーマは、「生成AI」や「DXハイスクール」環境を活用したものが多く、「授業づくり全般」「情報デザイン」「プログラミング」「ネットワーク・データ活用」などに分類し、それぞれの分野で、発表者と聴き手によるオンライン座談会を実施した。事後アンケートからは、オンラインと対面のそれぞれの参加者から高い評価を得ることができ、運営側に対する労いの言葉を沢山いただいた。

毎年夏に開催される「全国高等学校情報教育研究会全国大会（全高情研）」は令和8年8月7日（金）・8日（土）に神奈川大学（調整中）で開催されることになった。近年、「全高情研」が「夏フェス」と呼ばれるのに対し、「情報科実践事例報告会」は「冬フェス」と称されるようになったが、十数名の神奈川県情報部会役員の「チーム神奈川」は、冬・夏・冬フェスを連続する運営で緊迫感が続いている。全国の情報科の教員はしばらく神奈川から目が離せない状況が続くことになるが、今、神奈川県情報部会は、全国の情報科教員をつなぐハブとなる役割を担うという覚悟を持っている。